



Title	子どもを元気にする答え方：レッツ! 聞き上手母さん <最終回>
Author(s)	仲, 真紀子
Citation	ファミリス, 2008(11), 22-23
Issue Date	2008-11
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/44756
Type	article
Note	編者：社団法人 静岡県出版文化会
File Information	LKK2008_6.pdf



[Instructions for use](#)

子どもを元気にする答え方



北海道大学大学院教授
仲 真紀子

今 号は、応答について考えてみましょう。二人の心理学者、ヴィゴツキー先生とワイナー先生の提唱した説を参考にしたいと思います。

教育心理学者であるヴィゴツキー先生は、子どもが自力で達成できるレベルよりも少しだけ上のレベルを「最近接領域」と呼び、この領域に働きかけることが、子どもの教育においていちばん効果的であるとしています。

本欄の1回目で、助数詞（本「枚」など）に関する調査を紹介しました。幼児の前にお皿やスプーンなどを並べ、数えてもらいます。母子のやりとりを調べたところ、母親は子どもが使う言葉のレベルが少し上のレベルの言葉で答えていました。

幼児がお皿を「3!」と数字だけで数えると、母親は「はい、3個ね」と、子どもの言葉を否定することなく簡単な助数詞（個）を使って返事をします。子どもがお皿を「3個!」と数えると、母親は「はい、

3枚ね」と、より適切な助数詞を使って答えます。まさに最近接領域に働きかけているといえるでしょう。

しかし、後でアンケートをとってみると、母親は必ずしも自分の言葉かけを記憶していませんでした。意識せずとも、適切な応答がなされているようです。このようなことは最新の双方向型のDVD教材でも、なかなかまねができません。子どもの話を聞き、応答を返してさえいれば、適切な情報が提供される。これはすばらしいことだと思います。

ワ イナー先生の説もたくさんのご意見を教えてくれます。

ワイナー先生は、人が成功したとき（試合に勝ったなど）や失敗したとき（試合に負けたなど）に、その原因を何に求めるか（これを「原因帰属」と言います）を調べました。そして、「原因帰属」の仕方が、その後の意欲ややる気とかかわっていることを示しています。

ワイナー先生によれば、失敗や成功の原因を何に求めるかには、原因を自分の内部に求めるか外部に求めるか、安定した要因に求めるか不安定な要因に求めるかの組み合わせによる四つのパターンがあります。

たとえば自分の内部で安定なのは「能力」や「性格」、内部で不安定なのは「努力の量」

さあが！
能力あるわ！
お母さんに似たのね♪



(イラスト/村松麗子)

や「準備の有無」です。また、自分の外部で安定しているのは「いつも指導してくれるコーチ」や「一緒にプレイする仲間」、外部で不安定なのは「たまたま対戦したチーム」や「天気」「運」などです。

子 どもが成功したとき、あるいは失敗体験うながせばよいでしょうか。

成功したときには「能力があるね」「がんばる性格だ」など、本人の内部で安定している要因に帰属してやれば、その体験は今後のやる気につながるでしょう。また「努力したから」や「準備がよかった」などの本人の内部で不安定な要因も、「これからもがんばろう」という気持ちにつながると思われま

す。これに対し「コーチがよかったから（本人の外部で安定）」や「相手が弱くてラッキーだった（本人の外部で不安定）」では、次への意欲につながりません。

失敗のときは、「能力がない（本人の内部で不安定）」では落ち込んでしまいます。「努力が足りない（本人の内部で不安定）」や惨敗のときには「相手が悪かった（本人の外部で不安定）」という言葉かけもよいかもしれません。

適切な応答は話を聞くことと同じく大切です。毎日子どもの話に耳を傾け、応答し、たくさんのお話を楽しんでください。

●なかまきこ ●福岡県生まれ。北海道大学大学院文学研究科教授。認知心理学、発達心理学専攻。母子会話、子どもの記憶に関する心理学研究のほか、子どもの司法面接、目撃証言などの研究を行っている。主な編著訳書として「目撃証言の心理学」（共著、北大路書房）、「子どもの面接法—司法手続における子どものケアガイド」（アルドリッジ・ウッド著、仲編訳、北大路書房）など。